禁書SS 無能力者狩り対抗作戦

うぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
禁書ＳＳ　無能力者狩り対抗作戦

【Ｎコード】
Ｎ０９７５Ｕ

【作者名】
ういぃ

【あらすじ】
これは超電磁砲が始まるより前の話です。
新訳とある魔術の禁書目録のネタバレを含みます。
浜面たち無能力者組織スキルアウトの話です。

（前書き）

授業中に書いた短編小説ＳＳです。
かなり短いですけど、読んでもらえると嬉しいです

学園都市、人間に超能力を与える街だ。しかし、超能力を与えられない不遇な人間もいる。
かつて、その学園都市で能力者以上に恐れられた無能力者がいた。無能力者と言えども能力が使えないわけではない。微々たる物だが使えるのだ。しかし、その無能力者は本当に超能力を使えなかった。
「それが俺の聞いた話だ」
陰湿で感情の無い声、例えるならばコピー機だろうか。俺たちが所属している無能力者組織のリーダーであり、親友の駒場利徳は淡々と話した。
「そんなすごい奴がいるのか」
純粋に感嘆の声を漏らしたのは同じ無能力者組織のメンバーの服部だった。忍者の末裔と自称するだけに、姿格好は忍者のコスプレのようである。
すかさず、俺ー浜面仕上は疑問を口にした。
「月並みな都市伝説だろ？　能力者より恐れられるなんて人外もいいとこだ」
浜面の言葉が図星だったのか、駒場は後頭部を気まずそうに掻く。そりゃそうだ。たとえ本当だとしても、浜面はそれでも信じないハズだからだ。
やがて駒場は携帯を取り出し、いじり始めた。浜面はすかさず横槍を入れる。
「なあ、何してるんだ？」
「まあ待っとけ」
淡白な返事を返され浜面はムッとした。
無機質な電子音だけが部屋に響く。指を止めて駒場は携帯の画面をこちらに向けた。目が「これを見ろ」と物語っているので浜面と

服部は画面を覗きこんだ。
黒い背景にやや赤い文字。ホラー関係のサイトだろうか。並べられた文字を目で追っていく。
学園都市の七不思議ー２０××年更新と書かれている。
「昔のサイトじゃないか」
「三番目の項目を見てみろ」
駒場が苛立った声で催促する。第一の不思議、第二の不思議と続き第三の不思議があった。
タイトルは『最強の無能力者』。
「最強……？」
駒場から携帯を受け取り、第三の不思議をクリックした。しばしの待ち時間のあと、大量の文字群が画面を覆い尽くすように現れた。うっ、と明らかに嫌そうな顔した浜面に駒場は読むよう勧める。目を当てるのも億劫になるが、とりあえず読めるだけ読むことにする。

学園都市の能力者を圧倒する最強の無能力者がいる。

という書き出しだった。文章力こそ無いものの、砕けた文章は教養の無い浜面にとって読みやすい物だった。内容は体験談になっており、無能力者狩りに会った時、そいつは能力をものともせず殴り倒したという。それをネットのユーザーどうしで質問と解答しあうサイトに載せた。ところ、筆者と同じ体験をしたという解答が多数寄せられたという。そこで『能力者に馬鹿にされてイラっとした』なんて蛇足に浜面は吹き出した後、携帯を駒場に返した。
「汚らしい文章だが、現実味がありそうだな」
「そうだ。近々、能力者が無能力者狩りを再開するらしい。その最強に手助けして欲しくてな」
「猫の手も借りたいってか。あの金髪の女の子が気がかりなのか？
やーいロリコンロリコン〜！」
「ち、違う！！」

叫んで否定した駒場だが、すぐに俯いて黙り込んでしまった。その様子に浜面また大笑いする。
そこで、ずっと黙っていた服部が声をあげた。
「本当だとしても、学区しか分からねえぜ？　もし違う組織にでも入っていたらどうする？」
「頭を下げて頼むだけだ」
駒場が俯いたまま慎重な面持ちで返した。浜面を豆鉄砲を眉間に食らわされたようなマヌケな顔をする。
服部は少し黙ったあとに口を開いた。
「じゃあ、こうしよう。他組織には当たらず、まず始めに一般人から情報収集だ。他人をわざわざ助けるような奴だ。他にも助けているだろう。その中に顔を覚えている奴を探すんだ」
考えた内容はすでに整理されていたのか、迷いの無い口振りだった。
「ちょっと待てよ！」
つい口に出した言葉で他二人の視線が浜面に向けられる。
「つまり、それが失敗したら他組織を頼るのかよ！　弱みにつけ込まれて俺たちがやられたら元も子もないだろ！？」
第三者の意見だな、と駒場は薄く笑うとありきたりなメモリーカードを取り出した。
「ここに相手の弱みがある。1引く1はどうなる？」
「相殺されるってか。抜かりないな」
「こんなことでお前らに迷惑をかけたくないのでな」
駒場が立ち上がったのにつられて浜面と服部も立ち上がる。
「さて、罪もない人間を虐げる勘違い超能力者をはっ倒しに行こうか」
……。

「で、話ってどう聞けばいいの？」
基地から出た浜面の開口一番はそれだった。直後、駒場と服部の拳骨が浜面にヒットした。ゴツンという鈍い音ともに浜面は地に伏せる。
「い、いや、だって俺ナンパしかでしか知らない子に話しかけたことないもん」
「小学生からやり直せ！」
「あんな気恥ずかしい奴らの輪に入れるかよ」
腕を組んで怒りを表したが、二人は黙ったまま浜面を見つめていた。
「人のこと言えなかったな、俺」

……。

浜面たちは第七学区という出店や生徒たちが集まる広場で聞き込みを開始た。いかにも不良な格好が三人も集まれば警戒する人間もいる。さて、どうしようかと悩んでいると駒場が先手を切り、女子高生に話しかけた。いきなり狙われて驚いたのか顔が引きつっている。しかし、駒場は脅すようなことはせず、ジェスチャーを交えつつ話し始めた。女子高生も緊張がほぐれて笑顔を浮かべている。
「良い見本だな」
服部が感嘆の声を漏らした。次に服部が男子三人組みに話しかけた。ジェスチャーこそしていないものの、三人組みは気兼ねなく話せているらしい。
「じゃあ、俺も行きますか」
狙うなら女の子だな。浜面は目の前を通りがかった私服姿の女の子たちに手を振り上げながら声をかける。

「へい彼女たち！　ちょっと話を」
「ナンパ～？　間に合ってますう～」
浜面の言葉をさえぎって、女の子たちは走って逃げてしまった。
寂しく振り上げられた手を下ろして、浜面を涙を飲んだ。次があるさ、頑張れ浜面仕上！
自分で自分を激励して、同じ轍を踏まないように慎重に選ぶ。ベンチで座っている暗そうな男にしよう。浜面は走った。
一人でアイスを舐めている男子に、浜面はテレビで見た街頭インタビューを真似して話しかける。
「ちょっとお聞きし」
「か、かつ上げ！？」
「え、違っ」
「僕はあの時の僕じゃないぞ！」
「話を聞け！！」
浜面が止める間もなく、男子は手から風を出して浜面を吹き飛ばした。電柱に背中から激突し、酸素を吐き出す。意識が薄れてきた。
「不、幸……だ……」
そして意識を失った。

……。

目を開けると、オレンジ色の空が視界いっぱいに広がっていた。背中の痛みがにわかに蘇ってきて意識が定まる。起き上がると場所は公園だった。ベンチで寝ていたらしい。
「やっと起きたか」
声のした方を見ると、服部が同じベンチに座って缶コーヒーを飲んでいた。どうやら駒場はいないらしい。
服部が差し出したコーヒーを掴み、軽く振ってフタを開けた。苦

い味の中にある微かな甘みには慣れた。喉が乾いてたせいもあるが、失敗した嫌な気分を紛らわすために一気に飲み干す。ぶはぁ、と甘ったるい息を吐き出し、もう一度ベンチに寝転んだ。
「不器用だな、俺」
「リーダーの器じゃねえな」
そう言って吹き出した服部の腹に拳を叩き込んだ。腹を押さえて撃沈した服部を指差して浜面は大笑いする。
「悪友にも言っていいことと悪いことがあるんだよ！」
「自負してたくせに……」
涙目で反論した服部をスルーして、立ち上がる。駒場を探すのだ。
「駒場なら、もう帰ったぜ」
痛みが引いたのか服部は腹から手を離していた。
「帰った？」
「ああ、用事らしい」
「用事？　アイツが？」
「電気店に立ち寄るとか言ってたな。ジャンク品で何か造るらしい」
「ふぅん。アイツ頭いいのにどうして無能力なんだろうな」
「演算は完璧らしいし、レベルが上がってもおかしくないらしい」
服部がＢ４サイズの紙をポケットから取り出した。数字の羅列が並べられており、右上の欄に『駒場利徳』と書いてある。成績表のようだ。
浜面は成績表を受け取り、中身を眺める。輝かしいほどの好成績だった。
「こんなもんドコで手に入れたよ」
「貸してもらったまま返し忘れた」
「バカか。まあいいや。にしてもスゴいな」
「だろ？　オレたちとつるんでいるのが疑わしいぐらいだ」
服部は缶コーヒーをゴミ箱に向かって投げた。見事に入ったのを見て拍手してやる。
浜面も入れてやろうとゴミ箱に向かって投げた。しかし、缶コー

ヒーはゴミ箱には入らず、スキンヘッドの大男の頭に当たった。
血の気が引くのを全身で感じる。スキンヘッドの大男はゆっくりこちらを振り向くと、地響きするほどのスピードで走り出した。
回れ右をして全力で走り出す。大男の怒声を背にしながら服部が浜面に詰め寄った。
「なにしてんだよバカ！！」
「不幸だあああああああああ！！」

……。

「厄日だ今日は……」
ボロボロのベッドに寝そべりながら、浜面は天井を見つめた。
あの後、三十分に及ぶ鬼ごっこの末、疲れ果てたスキンヘッドをなんとか巻いて逃げきれたのだ。日頃鍛えているおかげだろう。役に立つタイミングが最悪だが、ここは素直に自分を褒める。ーよくやった俺！
手近のリモコンを操作してテレビを点ける。映し出された画面にはツリーダイアグラムがどうとかという浜面には理解出来ない番組がやっていた。チャンネルを変えていつものお笑い番組を見る。ちょうど司会が次のゲームを説明しているところだった。放送局の中には学園都市が放映を許している物があり、アニメもたびたび見れた。陰気臭い政治や科学番組なんかより、もっとお笑いとかを増やしてほしいと愚痴っている。
ぼぉ～っとしていると携帯がいきなり鳴り響いた。浜面は近くの携帯を掴み、欠伸をしながら開いた。着信は、『駒場利徳』だった。通話ボタンを押す。小さな機械音と共に焦ったような声が聞こえてきた。
「は、浜面……」

「どうした鼻息荒げて」
「無能力者の女の子がさらわれた」
「かっ……」
声が詰まった。いきなりということが大きい。状況を飲み込む思考が追いつかない。
「なっ、どういうことだよ！！　何よりも、それ知っててなんで助けられなかった！？」
半ば逆ギレで叫んだ。押し付けがましい言葉なのは自覚している。事情も聞いてないのに助けられなかったと問うのも論外だろう。そもそも、それをなぜ電話する必要があるのだろう。
そんな理不尽な問いかけに駒場は淡々と話す。
「その子と知り合いでな。電話が、連れ去った奴らから掛かってきた」
「そいつらはいったい誰だ？」
「無能力者狩りの連中だよ」
淡白な言葉に、初めて怒りが込められた気がした。不確定で空中に拡散していた怒りが集約する。
歯を食いしばり、噛み合わない上下の歯がカチカチと音を鳴らす。歯噛みをして黙っていると駒場は話を続ける。
「奴らの要求は俺たち組織の崩壊。または他組織との相殺」
「飲まなかったら？」
「端から見れば合法に見える方法でその子を殺す、と」
「は？」
これはまた現実離れした言葉が出てきた。殺す、なんて平気で言う連中が未だにいることに浜面は苦笑した。
そして薄く笑う。
「面白いこと言うなあ。全く、くくく……」
かはは、とついに大笑いを始めた。
「楽しいこと言う奴らだなあ。ぶち殺してぇや」
「同感だ。だが、そう上手くはいかない。奴らの中に脳の電気信号

を操れる能力者がいるらしい。下手に手を出せば取り返しがつかないことになるぞ」
「記憶でも無くさせるつもりか？」
「いや、記憶を無くさせたうえで、二度と何も記憶出来ないようにする。いわば鳥頭になっちまう」
「天秤がここまで傾いてると笑えてくるな」
「いいか。絶対に手を出すな」
「そんなんじゃ奴らの思うつぼだろ！！」
「だからといって！　反撃しないわけじゃない」
「……、手があるのか」
　すると、携帯の向こうから機械をこすりつけたような、カチャカチャという音が聞こえてきた。なにかいじっているらしい。
　浜面が簡単な予想図を浮かべていると、駒場が用事を済ませたようで、重いものをようやく降ろせたような深いため息を吐いた。
「身体能力を強化するギプスタイプの機械だ。脳に働きかける信号を用いて常人の筋力から反射神経まで上げる。マニュアルどうりにしてても時間が掛かってな。どれだけ早くても明日になる」
「お前まさか」
「そのまさかだ。こんなことでお前たちの居場所を失わせない」
　決意がある言葉の裏に少なからず恐怖があるのが分かった。母音の語だけが震えている。
　浜面の携帯を握る手に汗が吹き出す。
「戦うつもりは無い。助け出すだけ」
「悪いけどさ」
　浜面は駒場の言葉を遮って、一拍おいて言った。
「お前にそんな橋、渡らせねえ。お前だけに重石を課せるもんか」
「これはオレの問題だ」
「俺たちの問題だ」
　キッパリと答えた。揺るぎない言葉だった。真が通っているのが分かる。

「組織の崩壊？　他組織との相殺？　そんなこと、お前一人のことなのかよ。どう考えたって俺たちにも干渉する余地がある」
「そうか」
駒場はあっさりと肯定した。だが
「しかし、それでも関わらせない。奴らはレベル３の集まりだ。信号操作に電気使い。空力使いに水素鉄槌。とくに最後は爆発させてくる。普通の人間じゃ木っ端みじんだぞ」
水素爆発。それを引き起こすには条件が必要なハズだった。無理に能力で爆発させる、というところだろう。
「それがどうした？」
「なに？」
駒場からすれば、先ほどの能力の説明は威嚇のようなものだろう。そんな奴らとやり合えば命に関わる。
だが、浜面の決意は揺るがない。
「駒場、俺たちは友達だ。なら、頼ってくれよ。どうして全て自分で背負う！　俺にわざわざ知らせたのも、本当は助けてほしかったんだろ！？　一人で命掛けの世界に飛び込むのが怖かったんだろ！？　なら、頼れよ駒場！！　一人でヒーローになんてなろうとするなよ！！！」
「頼ってくれ、か。余計なお世話だ」
携帯を落としそうになった。コイツ、今なんて言った？
「助けてくれなんて頼んでいない。関わるな。いいか、これはオレの問題だ。浜面みたいな馬鹿に来られると迷惑だ」
「テメェ、本気で言ってんのかよ！！」
「本気だ。馬鹿は黙ってろ」
浜面の堪忍袋の緒が切れる音がした。壁を殴りつけて、携帯に向かって叫ぶ。
「馬鹿バカ言いやがって！！　もういい！！　勝手に野垂れ死んでしまえ！！」
「そうさせてもらう」

一方的に通話が切られた。浜面は憤った顔を無表情に戻し、携帯をいじる。誰かと繋がったようで携帯が通話画面になる。
テレビに視線を移し、耳に携帯を当てる。
「よお、浜面」
出たのは服部だった。明らかに笑いを含んでいる言葉に浜面は嫌な顔をする。
「盗聴させてもらったぜ。お前のこっぱずかしい説教！」
「言うなよ。熱くなりすぎて口が滑ったんだ。でも、あれは俺の本当の気持ちだ。」　なに一つ偽りの無い言葉だった、そう自分で言い切れる。駒場にだって伝わる、って思っていたのに。
服部は浜面の気持ちを察してか、笑いを止めた。
「多分、本気で全て一人で背負う気だぞ駒場。身体能力を強化する機械とか言ってたが、もしかして昼間の用事ってなぁ、ソイツ作るためか」
「間違いないな。さて、どうする服部」
「決まってんだろ。やられっぱなしじゃ割に合わねえ」
「だよな。言うと思ったぜ」
二人して笑う。
浜面は笑いをニヤケ顔をしているままだが笑いを止めた。
服部も笑いを止めた。向こうじゃ浜面と同じくニヤニヤしてるだろう。
浜面が先に切り出す。
「ヒーロー気取り君に手を貸してやろうぜ」
「そりゃいいや。赤外線傍受を利用した追跡装置があるから、動き出すのを待つぞ」
「分かった。多分、動くのは明日だ。いまのうちに集められるだけ人員を集めろ」
了解、という服部の返事を聞いて浜面は携帯を閉じた。

……。

次の日、駒場利徳は第十九学区に来ていた。荒廃した世紀末のような静けさが駒場利徳という少年には似合っていた。古い科学技術を集めて、そこから新たな発見をという場所なのだが、第三者から見ればゴミの埋め立て地を連想しそうなものだ。

スス臭いビル群の中に、奴らはいた。

同じ学校なのか、男女の制服は似通っている。そして、電柱に、アナログにもロープで縛り付けられた女の子がいた。

顔をしかめた駒場に、一番背の高い男が前に出て言った。

「やっと来たか。駒場利徳」

その男の声に女の子の顔が上がる。

「駒場の、お兄ちゃん？」

「フレメアっ！！」

フレメアとはその女の子の名前だ。

駒場が前に出ようとすると、何か目の前に圧縮された空気のようなものが発生した。

「水素鉄槌だ。動くと顔が吹き飛ぶぞ」

駒場が舌打ちすると、今度は女が前に出てくる。

「組織は潰したのかしら？　あんたたちみたいな害悪、私たち能力者が排除してやるわよ」

「ヒーロー気取りか？」

駒場が挑発するように言った。

水素鉄槌がそれに答える。

「気取りじゃない。ヒーローだ。無能力者なんて学園都市にいらない人間を退治していくヒーロー」

「幼い女の子を誘拐して、縛って、人質にする。オレの知っているヒーローには程遠いな」

「悪に人権なんか無いだろ？　すぐに殺さない僕の優しさを誉めて

ほしいね」
「誉めてやろう。無能力者のオレからな」
駒場は笑った。
「だが、オレにも正義があるのでな。いい加減に反撃をさせてもらうぞ」
駒場は右手で目の前の水素鉄槌で圧縮された空気を払う。そして、地面に極小規模のクレーターが出来る勢いでやや斜め前に飛んだ。
水素鉄槌が慌てたように水素をかき集めるのが見えた。奴の周りの空気が淀みはじめる。
「水素鉄槌の応用を見せてやる！！」
淀んだ空気が、まるで竜の頭部を模した形になり、駒場に迫ってきた。対して駒場は腰に隠していた取っ手の上部分が大きく膨らんだ拳銃を取り出し、引き金を引いた。
カマイタチのような風を纏った極太の弾丸が射出された。それは水素の竜と激突した直後、音が聞こえなくなるほどの爆発が起こった。吹き飛ばされ、鉄骨に背中をぶつけて、ようやく耳に音が届いた。
今度は風の塊が駒場を狙う。駒場は鉄骨の後ろに回り盾にした。黒板を爪で引っ掻いたような耳障りな音が鳴り響き、鳥肌が立った。
動こうとした瞬間に体に焼けるような痛みが走った。弾かれたように倒れる。振り返ると手首から先に紫電を這わせた男がいた。
「無能力者風情が、たかだか機械に頼ったところで勝てるわけないだろ」
水素鉄槌は大笑いしながら両手に水素を集めて、形を整えていく。
「動くなよ。これ以上やると、あの女の子の頭をいじるぞ」
「や、めろ……」
水素鉄槌が集めた両手の水素が、巨大な竜を作り始める。
「トドメだ。さようなら。ヒーロー気取り君」
巨大な竜と化した圧縮された水素が、地響きに似た轟音をたてながら駒場に迫る。

駒場は目を閉じた。諦めた。今更、浜面に助けを求めなかったことを後悔している。結局、何一つ守れやしなかった。近づいて、フレメアを奪回して、あとは逃げるだけ。そんな安い仕事だと高をくくっていた。

何か鈍い音がした。反射的に目を開ける。

直後、閃光が水素の竜を貫いた。

爆発が一気に駒場たちを吹き飛ばした。地面を何度も転がり続けて、ビルの壁に体をぶつけてようやく停止した。意識を失いそうになり、視界がぐらつく。

いくつもの悲鳴が聞こえた。そこら中から打ちつけたような音が響いてくる。

「なん、だ……？」

見えた視界の先に広がっていたのは、まるで爆弾をたくさん落としたかのような巨大なクレーターと、地面に転がっている無能力者狩りの奴らだった。

血が頭に回り始め、フレメアを思い出す。目をカッと見開いて、辺りを見回す。幸いにも爆発範囲から遠く離れており、鉄骨に縛り付けられているおかげで吹き飛ばされることも無かったらしい。

ふぅ、と一息つくと、水素鉄槌が起き上がるのが見えた。

「ちくしょう。なんなん……」

水素鉄槌がある一点を見つめたまま固まった。

……。

浜面仕上の前にあったのは、巨大なクレーターと転がっている人間だった。

手に持った携帯から声がする。
「狙撃成功した。あの女の子は無傷だ」
服部の声だった。
「すげぇなお前。さて、駒場は無事か！？」
ビルの角から駒場が這いずって現れる。顔からは疲労が見え、なにより怪我がひどかった。上半身のいたるところが焼けているし、擦り傷だらけだった。
浜面は駒場の手を掴み、肩を貸して立ち上がらせる。
「なんで来た……」
「お前の命令なんか聞くわけねえだろ。勝手に追跡させてもらった」
駒場はしばし表情を固まらせていたが、小さく吹き出すと口の端を釣り上げて笑った。
「全く、お前は本当にお節介な奴だな」
「それはコッチのセリフだ。居場所と女の子をたった一人で救おうとするお節介な奴だよお前も」
浜面も言い終わった途端に吹き出す。後ろにいた組織のメンバーも合わさって爆笑していた。
みんなして笑っていると、携帯から焦ったような服部の声が聞こえてきた。
「逃げろ浜面！！」
「へ？」
見れば、こちらを見たまま固まっていた男が、両手に淀んだ空気を集約させているようだった。
その異様な光景を浜面は凝視していた。
「言っただろう。水素爆発を使う能力者がいると」
かすれた声で駒場は言った。
浜面は反射的に走る。しかし、駒場を支えたままじゃ速く走れない。
「浜面。オレを置いていけ」
「出来るかよ！！　リーダー一人に組織全て背負わせて見殺しにで

きるもんか！！」
「なら、肩を話せ」
「はぁ？」
浜面が答える前に駒場は自分の足で、水素鉄槌に向かって走り出した。人間とは思えないスピードで、走る駒場に浜面は声すらかけられずにいた。
そうか。あの身体能力を強化する機械を使っているのか。
疑問を無くしたと同時に、駒場は水素鉄槌を殴り飛ばした。ゴロゴロと勢いよく転がり、地に伏せた。
浜面はそれを合図にするかのように声を張り上げる。
「一気に攻めるぞ！！」
オオー！！　というメンバーの掛け声と共に浜面たちは走り出した。呆気に取られた能力者たちは、浜面たちがかなり近づいてから、ようやく能力を使う。
「遅ぇ！！」
浜面が男を殴り飛ばした。悲鳴も上げずに男は気絶する。そして、周りから殴る音や悲鳴が聞こえる。
「正義の鉄槌だァァあああああああああ！！」

……。

浜面たち組織のメンバーは、黄泉川愛穂という巨乳の女先生に叱られていた。防弾チョッキを着込んでおり、とても先生にさ見えない。
その理由は、警備員という役も務めている。警備員と言っても、先生たちが街の治安も守る組織だ。
浜面たち一人一人に拳骨を喰らわせて、黄泉川は呆れた口調で言った。

「いくらなんでもやりすぎじゃん。能力者の子たちは全員重傷だし」
「仕方なかったんだよ」
借りてきた猫のように大人しくなった浜面に、黄泉川は拳骨を喰らわせた。
「言い訳するな。でも、よくやったじゃん」
浜面を黄泉川の顔を驚きの表情で見つめた。対して黄泉川は満面の笑顔を浮かぶている。
「あんたたちの、弱い者を守ろうとする精神は必ずみんなから認められるじゃんよ」

……。

あれから数日後、あの女の子は無事との報告を駒場から聞いた。
病院に毎日通ってきては抱きついてきて、鬱陶しいとかぼやいているが、内心では嬉しいのが筒抜けだ。
少年院から出たあとに再会した仲間たちの顔から笑顔が増えた。
俺たちが認められるために正義を貫こうと思う。
まずは無能力者狩りに立ち向かっていこうかな。
これから忙しくなりそうだ。

それから更に数ヶ月後、駒場利徳は死んだ。
学園都市の闇によって消されのだ。

そしてネットでは、第三の不思議が書き換えられていた。

どんな能力も効かない少年、と。

そして、学園都市の闇を目の当たりにし、自暴自棄になった浜面の前に

その少年は現れた。

そして、浜面は学園都市の闇と戦うことになる。

第三次世界対戦の中で……

完

（後書き）

どうだったでしょうか。
まあ、ラストの浜面の決意から、どうしたらあんなに暴れるんでしょうね

感想などお待ちしています！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0975u/

禁書SS 無能力者狩り対抗作戦

2011年10月9日02時57分発行